深刻な教員不足…保護者の声 2
～教員不足と多忙化の解消を切望～

保護者の声から想像以上に学校の劣悪な状況が伝わってきました。教員を確保できない学校からは、負担増に苦しむ悲鳴が聞こえます。

○娘と同じ幼稚園に通わせている友人が、教員が足りないからと頼まれて復帰しました。１歳の子が保育園、４歳の子が幼稚園児なのに担任を持つことになり体力的にも持つかどうか心配です。安心して子育てと仕事ができるようになってほしい。

○長女（２年生）の担任は、体調不良で４月からの復帰が延び新年度が始まりました。そのため臨時の講師が担当。９月から担任の先生。10月から欠勤。以降副校長先生が担任し、教科の一部は他の先生が交代で分担という状況でした。担任の先生が定まらない環境は、子どもに不安を与えたと思います。

小坪小学校を1970年に校長で定年退職された小川宗一先生は、1965年に「子どもらは犠牲になる～学校の実態を訴える～」を発行し、教師を取り巻いている雑務の実態を具体的に示し。教育行政家や保護者は、あまりにも大きな負担を教師に求めている。この煩雑さを改めなければ、日本の教育はじり貧に陥ってしまうと指摘し、教師を子どもに返そうと訴えてきました。

教員不足と多忙化は、何十年も前からの古くて新しい社会問題です。過労死ライン以上勤務する教師の割合は、小学校で３割強、中学校で６割弱います。　また、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）による国際教員指導環境調査（2018年）でも、日本の小中学校教員の仕事時間は調査国中で最長でした。

学校と保護者は、永年にわたり現場の切実な声を政府に要請してきました。しかし、政府は実態を改善させる計画的・具体的な予算対応をしてきませんでした。一方、2020年度からは、英語教育の早期化・教科化、小学校へのプログラミング教育の導入、道徳の教科化や評価など、教員の負担はますます増大しました。これでは、教員と子どもが犠牲になるのは明らかです。

尾木直樹さんは、「本気で手をうたなければダメです。学校がつぶれると思っています。大胆な労働時間の改善など、抜本的な対策に踏み切らないと、日本の子どもたちと教育は窒息しかねません」と述べています。教員不足と多忙化の解消は、政府・行政の責務です。本気で取り組むことを強く要請します。